

吳昌碩

尺牘

呉昌碩(ごしょうせき、1844年9月12日 - 1927年11月29日)は中国の清朝末期から近代にかけて活躍した画家、書家、篆刻家。清代最後の文人といわれ、詩・書・画・篆刻ともに精通し、「四絶」と称賛され、中国近代でもっとも優れた芸術家と評価が高い。

初めの名は俊(しゅん)、のちに俊卿(しゅんけい)、字をはじめ香圃。1912年(中華民国元年)、69歳から昌碩とする。別字に蒼石、倉石、倉碩。号に缶廬(フロ)、苦鉄、破荷、大龔、老蒼、石尊者、石人子、石敢当、破荷亭長、蕪青亭長、五湖印丐など。

その人生1

曾祖父、祖父、伯父、父のみなが郷試に及第して挙人となるエリート家系だった。父の呉辛甲は私塾教師であった。幼少の頃、父に篆刻を学んだが家計が苦しいために印材を調達できず、レンガに釘で文字を彫るなどした。このころからその才能の片鱗を示していたという。生まれる4年前にはアヘン戦争が勃発し、清朝が斜陽を迎えつつあった時代であったが16歳までは安定した生活を送り、塾に通い古文や篆刻を学ぶ。17歳のとき、太平天国の乱が起き、戦火を逃れるため避難生活を余儀なくされ、湖北省や安徽省などを5年間彷徨った。この間に弟と妹が相次いで餓死。また昌碩の母の面倒を看るために故郷に残っていた許嫁の章夫人をも失うという悲劇を体験。

Vしばらく学問に励み、22歳で清朝官僚を経験するが、25歳になると幕客(高級官僚の私設秘書)となり各地に仕え放浪する。愈曲園に就いて訓詁学や修辞学を学ぶ。29歳のとき、杭州や蘇州、上海などに遊学。蘇州では師友の楊岷に就いて書の研鑽に励んだ。その他に呉瘦緑(山)に篆隸篆刻の法を学び、施浴升(旭臣)に詩法を受け、施補華(均甫)・譚献(仲修)らに詩作の啓発を受けている。また收藏家として有名な呉雲・呉大澂・潘祖蔭・沈汝瑾との交流により鑑賞眼を高めている。

その人生2

施氏と結婚後、上海にて棲み、書や篆刻を売って生計を立てたが生活は苦しかった。1894年に日清戦争が始まるとわずかな期間江蘇省安東県の知県(知事)を務めるもわずか一ヶ月で致仕する。その後、50歳を過ぎて著名な芸術家の任伯年から本格的に画を学ぶ。この頃、上海の富裕層が呉昌碩の文人画を好んで買うようになり画名が高まった。やがて書や篆刻も高値で取引されるようになる。晩年には張熊・蒲華・胡遠(公寿)・康有為などとも交わった。

1903年、葉銘、丁仁・王禔・呉隠らと西湖湖畔に西泠印社を設立し初代社長となる。以降、上海を中心に活躍。1927年、中風が悪化し病没。享年84。

作風と業績

- 吳昌碩は特に篆刻の評価が高く、はじめ浙派に学び、ついで鄧派の影響を受け、さらに石鼓文などの研究を通して独自の刻風を生み出した。辛亥革命以降人気が急激にあがり日本でも日下部鳴鶴、犬養毅などが自用印を注文している。篆刻家の河井荃廬は彼を敬慕してついに西泠印社に入社した。
- 画は明の徐渭や清初の八大山人・石濤らから多くを吸収し、気品の有る個性的な画風を確立。揚州八怪や趙之謙からも参考としている。梅、藤、菊、牡丹などの花卉画を得意とした。
- 書は周代の石鼓文に基づき篆書に新様式を確立した。画上の書、跋文、硯銘などには行草書も多い。

嚴寒肖像

光緒二十八年正月廿五日

何人言世道中... 嚴寒肖像... 光緒二十八年正月廿五日



歲歲枝上紫 拒霜魄力兩寅 壬寅年夏 吳昌碩大筆



【增補第三版】

伏見冲敬編



印小圖

吳昌碩篆刻字典

歲歲惟多廿六
此可亞人執而
君于直樂又臨

吾家賴父先生嘗謂臨石鼓宜重嚴不不滯
宜虛宕而不弱近時作者唯摹父張先生能之矣
願學焉而已乙卯夏五月吳昌碩



公錄之六如可多日昨以齒與
服藥後不增病
 不肯行遂入德龍街
即是見效可幸
 忘怡園之物竟不有
 子刻牙印甚佳然之整
 不及乎瑚而逸趣已勝
 林佩也。近友人寄到竺進奏事
 進奏事印拓奉

●冰鏡道人如晤。日昨以輿夫不肯紆道入護龍街。所以怡園之約。竟不如願。尊刻牙印甚佳。然工整不及紫瑚。而逸趣已勝搗叔。佩甚佩甚。近友人寄到竺進奏事印。拓奉

鑒。弟謂其筆畫欠古。必非漢物。或者魏晉間人邪。大雅爲詳細考之否。奉去信箋板片。下角缶廬二艸字。擬換作篆書缶字。印四五百張。紙不必太好。因字太醜耳。費神費神。復請道安。弟俊卿頓首。初三。（服藥後不增病。即是見效。可喜。可喜。）

今錄道大如可多日昨以嶽
服弟後不增病
不肯行遂入護龍街

心怡園之約竟元五所
子刻身印古佳然之整
不及李瑚而逸越且勝精
林佩也。此友八字到竺
進素子印拓車

●昨潤兄來。讀示得悉。已蒙代為買連巾二刀。屬即付值。茲付去洋貳元五角。乞檢入。又印存板一塊。望從速代為飭印。印須好墨。免得重費清神也。(三四日想可印好。弟性急又性緩。唯閣下促之原之。)前日見老九印存。板口不甚佳。其所謂淡拓者。亦甚不動觀。法家何不諫之成人之善。佛書所謂善念不可不為也。復請。冠山仁兄早安。弟俊頓首。紙二刀一開八計有一千六百張是否。